

1
0
年
越
し
の
課
題

吉
田
浩
二

人物一覧表

- 佐藤豆夫（31）駅前不動産の事務員
杉川さやか（33）営業マン
鈴木（25）営業マン
荒井元彦（45）駅前不動産社長
伊藤まき（28）コンビニ店員
小谷一樹（36）DJ兼恋愛コンサル
大塚恭介（28）小谷の弟子。
涼風れいな（32）クラブ通いの女
えり（36）一樹の知り合い
若杉（25）バンドのメンバー

タント

あらすじ

佐藤豆夫（31）は駅前不動産で事務の仕事をしている。彼女がいたことがないと知られて飲み会の後、営業マンの杉川さやか（33）から恋愛コンサルタント兼D.Jの小谷一樹（36）を紹介される。

小谷は渋谷のクラブを拠点に活動していた。佐藤は小谷の指導の下、クラブでナンパを始める。

ある日、クラブに涼風れいな（32）が現れる。佐藤は一目ぼれし、彼女にアタックする。れいなはバンドの若杉（25）に入れ込んだり。佐藤は、かわr 実はれいなは人妻で旦那はロスアンジエルスに出張中だと知る。振られて落ち込む佐藤を小谷は叱咤する。

佐藤は、営業職に変わることにする。コンビニのレジの子に気安く声をかける。

○ 駅前不動産外観（夜）

雑居ビルの1階。小さな不動産屋。

周囲は真っ暗だが、店内はまだ明るい。

店の周りには田畠が広がっている。

○ 同・店内（夜）

髪を7・3に分けた佐藤豆夫（31）がパソコンと向き合っている。眼鏡をかけたり外したりしている。

杉川さやか（33）が近くに座り、書類に何か書いている。さやかは茶髪でスタイル抜群。

さやか「残業つきあわしちゃってごめんね」

佐藤「いえ」

さやか「書類がたまっちゃって。今度お返しに何かおごるわ」

佐藤「気を使つてもらわなくとも大丈夫です。どうせ家帰つてもやることないし」

さやか「毎日、ごめんね。助かる」

壁時計は9時を指している。

○ 同・店内（朝）

佐藤がパソコンで仕事をしている。

すぐ近くの席に高そうな背広を着た鈴木（25）が座っている。パソコンを睨んでいる。

さやかがテーブル席で中年男性と話している。

さやかと中年男性が立ち上がる。

佐藤「いってらっしやいませ」

と、佐藤が声をかける。

さやかと中年男性は店を出していく。

浅黒く筋肉質な荒井元彦（45）が奥の席に座っている。

荒井「決まるといいな」

佐藤「そうですね」

荒井「杉川さんなら大丈夫だろ」

荒井は机の上に置かれた物件の図面を睨んでいる。

荒井「両手で300万か」と、呟く。

鈴木「佐藤さん」

佐藤「はい？」

鈴木「ちよつといいでですか」

佐藤は鈴木の席に行く。

鈴木「グーグルドライブが動かなくなりました」

佐藤「ああ、これはね……」

と、パソコンをいじる。

鈴木「あっ、動いた。さすが」

荒井「杉川さんが決めたら、パソコン買い換えよう。佐藤君、今のうちに休憩行って」

○コンビニ内

佐藤がレジに並んでいる。レジには伊藤まき（28）が立っている。

佐藤はパンとコーヒーを出す。

まき「（微笑んで）いつもありがとうございます」

佐藤はどぎまぎして眼鏡の額をいじる。

佐藤「あ。あと、からあげくんを一つ」

まき 「はい。レジ袋はご利用ですか」

佐藤 「いえ」

佐藤はおどおどしている。パンとコーヒー、からあげくんをひつたくるように取る。佐藤の後ろに「キモイマン」と書かれた白いTシャツを着た男が立っている。佐藤が振り返ると目が合う。男はにつこりと微笑む。

○不動産屋外観（夕方）

○同・店内

壁時計は7時を指している。

さやかはテーブル席で、この前來いた中年男性と、その妻と小学生くらいの子供に何か説明している。

さやか「ありがとうございました」

女「いえ、こちらこそ。助かりました」

中年男性「杉川さんに担当してもらつてよかつたよ」

女「（子供に）あなたもお札を言いなさい」

子供「おばちゃん、ありがとう」

女「おねえちゃん、でしょ」

さやか「庭でペットも飼えるよ」

子供「僕、ワニ飼いたい」

さやか「気を付けて飼つてね」

客の家族が立ち上がる。さやかは店の入口までついていく。佐藤、荒井、鈴木は立ち上がり、ありがとうございます。した、とお辞儀をする。

× × ×

みんな帰り支度をしている。

荒井「飲み行く人♪」

鈴木「すみません。僕は用事あるんで」

荒井「杉川さんは」

さやか「1時間くらいなら」

荒井「佐藤君は行くよな」

佐藤はうなづく。

鈴木は立ち上がり、佐藤の横を通り

鈴木「毎回つきあつてますね」

佐藤 「ええ」

鈴木 「ほんとは行きたくないんじや」

佐藤 「いや、社長のおごりですし。鈴木さんは？」

鈴木 「彼女が待ってるんで」

佐藤 「同棲してるんだっけ。いいなあ」

鈴木 「今日は僕が飯作る日なんで。帰らないと」

○居酒屋外観（夜）

○同・店内

座敷に佐藤達が座つて談笑している。

荒井 「杉川さん、前はキヤバ嬢だったんだよな」

佐藤 「へえ」

荒井 「常連客と結婚したんだって。建設会社の社長だつけ」

さやかはうなづく。

荒井 「だから男性客の扱いがうまいんだろう

な」

さやか「まあ、色んなタイプの人と接してきましたから」

荒井「百戦錬磨か。今日も一本、おめでとう。
こうして酒が飲めるのも杉川さんのおかげ
だ。助かるよ」

荒井はグラスをかける。れいなはグラスを合わせる。

荒井は一気に飲み干す。

佐藤「どうぞ」

佐藤は荒井のコップにビールを注ぐ。

荒井「佐藤君についてどう思う」

さやか「こういう感じのお客さん、よくいた

荒井「いそだよな。眞面目な優等生タイプ」

さやか「うん」

荒井「カモにしてた?」

佐藤「自分、キヤバクラつて行つたことなく
て」

荒井 「そりや珍しい」

さやか 「ねえ、佐藤君って彼女いるの？」

佐藤 「いえ」

さやか 「もしかして一度も？」

佐藤 「いえ、何人かは」

さやか 「付き合った人数」

佐藤 「3人くらい……かな？」

さやか 「ほんとに」

荒井 「杉川さんにはお見通しだな」

さやか 「もしかして童貞？」

佐藤 「あの、あまりプライベートなことは……」

……

○居酒屋・外（夜）

佐藤達がたむろつていてる。

荒井 「じやあ、明日もよろしく」

荒井は片手を上げる。

佐藤とさやかはお疲れ様です、と頭を

下げる。

さやか 「佐藤君、家は？」

佐藤 「駅の反対口です」

さやか 「私も。一緒に歩こう」

2人は歩き出す。

○通り（夜）

並んで歩いている佐藤とさやか。

さやか 「さつきはいじってごめんね」

佐藤 「いや、いいですよ。慣れていますし」

さやか 「つきあつたことないでしょ」

佐藤 「：：：」

さやか 「しつこくてごめん」

佐藤 「正直言うとそうですよ。いけません
か」

さやか 「やつぱり。気になる子とかいない
のか」

の「

佐藤 「そりゃあ：：」

× フラツシユ ×

× コンビニのレジ。微笑むまき

さやか「どんな子」

佐藤「アニメのキャラに似てます」

さやか「なんてアニメ?」

佐藤「メイド服の高校生っていう……」

さやか「話したことは」

佐藤「機会があれば話したいです。さやかさんは?」

さやか「私は子供もいるし今はいいかな」

佐藤「子供いたんだ」

さやか「知らなかつた?」

佐藤はうなづく。

さやか「ほんと親に任せてるけど」

佐藤「へえ」

さやか「鈴木君に紹介頼んだら」

佐藤「前、そういう話になつて、紹介するつて言つてたんですがね」

さやか「それつきり?」

佐藤「ええ……あいつはいいよなあ。もて

そうでー

さやかは背伸びをする。

さやか「知り合いに恋愛コンサルタントやつてる男がいるんだよねー」

佐藤「恋愛コンサルタント?」

さやか「うん。よかつたら相談してみたら。

これ名刺」

さやかは佐藤に名刺を渡す。「小谷一樹 童貞脱出請負人。彼女ができるまでサポートします」と書いてある。

さやか「杉川さんに紹介されたって言えば安くなるから」

佐藤は名刺を見ている。

佐藤「童貞脱出請負人ね」

○木造アパート外観（夜）

2階建ての老朽化したアパート。

○同・佐藤の部屋（夜）

ワンルーム。棚に「メイド服の高校生」などの美少女漫画やラノベが並んでいる。

佐藤は布団に寝転がって名刺を眺めている。

スマホが鳴る。ラインのメッセージが届いている。

見ると友達のメッセージ。「ついに！ついに・・・（涙）彼女できました！」と書いてある。彼女と二人で撮った写真が載っている。男はこちらに向かってピースサインをしている。

佐藤はため息をつき仰向けになる。

佐藤「いいよなあ、みんな」

しばらく天井を睨んでいるが、立つて棚の方に行き、本の裏に隠してあるエロDVDを取り出す。

佐藤「俺にはこれが：：」

○駅前不動産・外観（朝）

○同・店内

荒井が奥の席に座っている。佐藤がパ

ソコンで作業している。

荒井「佐藤君」

佐藤は振り向く。

荒井「来月、新しい事務員が入ってくるんだ」

佐藤「はい」

荒井「佐藤君の仕事を引き継いでもらって、君には営業をやつてもらいたい。忙しくなつてきたし」

佐藤「営業ですか」

荒井「ああ。人が足りない」

佐藤「俺、人見知りなんで」

荒井「慣れればたいしたことないよ。無理にとは言わないけど」

佐藤「……」

荒井「知識はあるんだし、事務作業もできる。あと物件を覚えれば大丈夫だ」

○コンビニ外

佐藤が小谷の名刺を見て、電話をかけ

でいる。

佐藤「あの、佐藤というものです」

小谷の声「なにか?」

佐藤「杉川さんに紹介してもらつたんですけど」

小谷の声「ああ、さやかか。話は聞いてますよ。女の子とつきあつたことないんだって」

佐藤「：：：」

小谷の声「着手金3万。成功報酬30万だけど、さやかの紹介なんで10万でいいや。」

ラインはやつてる?」

佐藤「ええ」

小谷の声「じやあ、ラインで顔写真と全身写真を送つて。なるべくおしゃれな服着て。おしゃれな服つてわかるよね?」

佐藤「スーツとか」

小谷の声「ジャケット持つてる?」

佐藤「ええ」

小谷の声「じやあ、それ着て」

佐藤「わかりました。あの、自分メンタル弱いけど大丈夫でしょうか」

小谷の声「俺に任せとけば強くなるよ」

佐藤「はい」

小谷の声「あと「君にもできるナンパ」っていう本送るから。俺が書いた。俺からのプレゼント」

佐藤「あ、ありがとうございます」

小谷の声「まずはそれをよく読んで」

佐藤「はい」

小谷の声「じやあ、よろしくね！」

電話が切れる。

○ 佐藤の家の中

佐藤が写真をラインで送っている。

ジヤケットをはおり、白いポロシャツ、デニムをはいた全身写真。

電話がかかってくる。

小谷の声「写真見たけど」

佐藤「どうでした？」

小谷の声「チー牛だな」

佐藤「チーギュウ?」

小谷の声「いや、いい。髪型変えた方がいいよ。美容院で切ってきて。服装はそれでいいや」

佐藤「はい」

小谷の声「美容室で、モテそうな髪型にしてくださいっていえばしてくれるから。佐藤さんは渋谷、来たことある?」

佐藤「一度だけ」

小谷の声「ラインでおすすめの美容院送るから、そこで髪切つて」

佐藤「はい」

小谷の声「次の休みはいつ?」

佐藤「水曜です」

小谷の声「じゃあ、髪切つてから7時に喫茶店で待ち合わせしようか。場所はラインで送るよ」

電話が切れる。

○ 田舎の駅

おしゃれな格好をした佐藤が歩いている。

鈴木が女と手をつないで向こうから歩いてくる。

鈴木「あれ、佐藤さん？」

佐藤「あ」

鈴木「どうしたんですか。別人みたい。どこ

行くんですか」

佐藤「ちよつと渋谷に」

鈴木「へえ。渋谷ね。らしくないなあ」

○ 渋谷駅前

佐藤がスマホを見ながら歩いている。

周りはカップルが多数行きかっている。
すれ違ったカップルの女の方が佐藤を見て「ねえ、あれ、ださくない？」と
男に呟く。

○ 喫茶店内

ヤンキースのカツプを被った茶髪の小

谷一樹（36）が奥の席に座っている。

F U C K O F F T H E W O R L

Dと書かれた黒いTシャツを着ている。
佐藤がドアを開けて入つて来る。髪は
オールバックに変わっている。小谷を
見て会釈する。

小谷「佐藤さん？」

佐藤「はい」

小谷「どうぞ」

佐藤は小谷と向き合つて座る。緊張した様子。

小谷「俺は小谷一樹。DJやつてるけど、今はコンサルが本業になつてる」

小谷は無言で佐藤を眺める。

佐藤は俯いていたが、顔を上げる。

佐藤「なにか？」

小谷「印象が固い。タメ口でいいよ」

佐藤「はい」

小谷「髪はそれでOK。声はまあまあだな。

仕事は?」

佐藤「営業事務です」

小谷「接客業?」

佐藤「接客もたまに」

小谷「なるほど」

佐藤「：：：」

小谷「おれ、ずばずばと言つちやうほうだか

ら」

佐藤「いえ、そのほうがありますがたい」

小谷「初対面だから仕方ないかもしけれないな。

誰か好きな子はいるの」

佐藤「：：：いや、特には」

小谷「漠然と彼女が欲しいってことか。これ

からクラブに行つて声かけの訓練するけど

大丈夫?」

佐藤「はい」

小谷「よし、じやあ行こうか」

○ラブホ街（夜）

怪しいネオンが輝く通り。佐藤と小谷

が歩いていく。そこら中に酔っ払いと
カップルがいる。

○クラブ近くの通り（夜）

佐藤と小谷が歩いてくる。

がたいのいい男が一人、道端で女に絡
んでいる。周りの通行人は見て見ぬふ
りをして通り過ぎる。

男「来いよ。ほんとは好きなんだろ。すぐそ
こだからさ」

女「そ、そんなつもりじゃ……」

女は逃げたそうにしている。

小谷「おい、嫌がってんだろ」

男「あ？」

小谷「手を放せ」

男「んだと、てめえ」

男が振り返る。

男はポケットからナイフを取り出す。

小谷はいきなり男を殴る。ナイフが手
から落ちる。男がひるんだところで男

の股に蹴りを入れる。

男 「いってえ」

男は股を押さえてへたりこむ。

女は逃げていく。

小谷 「おまえ、二度と顔を見せんな」

男はうすくまつている。

佐藤 「すごっ」

小谷 「昔、格闘技やつてたから。あんなふうにはなるなよ：：：つて佐藤さんは大丈夫か」

○ クラブ入口（夜）

入口に大柄な黒人が二人立っている。

小谷の顔を見て、ノーチェックで通す。

佐藤と小谷が入つて行く。フロアからは様々な光があふれてくる。

○ 同・フロア内（夜）

フロアで踊っている若者達。

佐藤と小谷はその奥の、ピンクの照明

に照らされたピンク色のカウンターに座っている。

佐藤と小谷はビールを飲んでいる。

小谷「クラブは初めて？」

佐藤「ええ。都内自体あまり行かないし。行くとしても秋葉原か池袋」

小谷「草加からは来にくいからな」

ダンスフロアで、派手な格好をした50代の男が若い女に声をかけている。

女は気味悪そうに逃げる。

小谷「あれ見て。存在自体が痛い。存在の耐えられない軽さ、って映画知ってる？」

佐藤「題名は知っています」

小谷「あれは「存在の耐えられない痛さ」だな。そもそもこんなところにいるのがおかしい。ナンパできるのは若いうちだけだから。早く始めた方がいい」

佐藤はうなづく。

ダンスフロアの端で老人が女の子を連れ出そうとしている。

佐藤 「あれは？」

と、佐藤は指を差す。

小谷 「金で女の子を買う奴もいる。だけどそれをやると、男として成長できない。俺たちは中身で勝負だ」

佐藤 「・・・・・はあ」

小谷 「夜がふけるともっと混んでくるから。路上よりも、クラブの方が声かけしやすい」

佐藤 「声かけってどういうふうに」

小谷 「こんばんは、ここよく来るの？でいいんじゃないの。俺、クラブは初めてで、つて言つてもいいかもしれない。遊び慣れてないほうが受けがいいんだ。そうだな。実際に言つてみて」

佐藤 「ここで？」

小谷 「俺が女の子だと思つて」

佐藤 「：：：」

小谷 「さあ」

佐藤 「こんばんは、はじめがここで」

小谷 「ん？ 意味わからん」

佐藤 「こんばんは、僕ここ初めて」

小谷 「俺、つて言え」

佐藤 「俺、ここ初めて」

小谷 「聞き取りづらい。もう一度」

× × ×

佐藤が小谷相手にしやべる練習をして
いる。

ダンスフロアの中央で、音楽に乗つて
しなやかに踊る男がいる。周りの人々
が歎声をあげている。

佐藤もその男、大塚恭介（28）を見
つめる。

大塚がカウンターに来る。アロハシャ
ツを着たハンサムな男。

小谷 「うまくなつたなあ」

大塚 「小谷さん」

小谷 「久しぶりー」

小谷は大塚とハイタッチをする。

小谷 「この人、俺の元生徒。色々と教えても

らいな。俺はちょっと用事あるから。

10

分くらいで戻る」

小谷は行つてしまふ。

大塚「ビールください」

と、バー・テンダーに声をかける。

バー・テンダー「アサヒでいいですか」

大塚「それで」

バー・テンダーはビールのグラスをカウンターに置く。

大塚はそれを飲み干す。

大塚「うめえ」

佐藤が大塚を見ている。

大塚「はじめまして。弟子入りしたんだつて」

佐藤「佐藤です。よろしくお願ひします」

大塚「こちらこそ」

佐藤「小谷さんは?」

大塚「友達がいっぱい来てるんで、挨拶しに行つたんじやない」

佐藤「顔が広いんですね」

大塚「小谷さん、ここでD.Jもやつてると
ね」

大塚はスマホをいじつている。

佐藤「小谷さんとはどうやつて知り合つたん
ですか」

大塚「俺はここで。元々音楽好きで、よく飲
みに来てたから。佐藤さんと同じで女に縁
がなくて」

佐藤「えつ、ほんと? イケメンなのに」

大塚「コミュ障でね」

佐藤「彼女は?」

大塚「おかげさまでできたよ。何人か」

佐藤「何人も: : :」

大塚「小谷さんに任せとけば大丈夫」

佐藤「そう簡単にいきますかね」

大塚「俺も前は女の子と全然しやべれなかつ
たんだ」

佐藤「ほんとですか」

大塚「うん。家にこもって仕事してて、人と
接することもほとんどなくて」

佐藤 「引きこもり？」

大塚 「ああ、ちょっと待つて」

大塚はスマホをいじる。

大塚 「仕事はこれ」

大塚はスマホを見せる。数字が並んで
いる。

佐藤 「なんですか、これ」

大塚 「F Xをやっててね。これで稼いでる」

佐藤 「儲かるんですか」

大塚 「1日5万前後ってとこ」

佐藤 「すごっ。そんなにお金あるんならキヤ
バクラとか色々行けるでしょ」

大塚 「いや、そういう風俗関係は好きじゃな
いから。全く行かないね」

小谷が戻つて来る。

小谷 「色々、教わった？」

大塚 「自己紹介しただけ」

小谷 「そうか。体験談とか話しているのかと
思つた。だいぶ混んできたな」

ダンスフロアで大勢の若者たちが踊つ

て いる。カウンターにも何人か、女の子が座つて飲んでいる。

小谷 「あの子、行つてみるか」

小谷はカウンターの奥で一人で飲んでいる茶髪の子を指す。

小谷 「隣に座つて、適当に話しかけてみて」

佐藤 「：：：」

小谷 「声かけの練習に来たんだろ。まずは慣れることだ。さあ」

佐藤は席を離れ、女の隣に座る。女は佐藤をちらりと見る。

佐藤 「：：：」

女 「なんですか？」

佐藤 「いや：：：ちょっと」

そこへいかつい男が来る。

男 「なに、こいつ」

女 「知らない」

男 「あんた誰？」

佐藤 「（おどおどして）す、すみません」

佐藤は小谷たちのところに戻つて来る。

小谷「残念。彼氏待ちだつたか」

大塚「どんまい。そういうこともあるよ」

小谷「次はあの子行こうか。あのブラウス着
た子」

小谷はダンスフロアの端っこ手すり
にもたれて休んでいる女の子を指す。

佐藤はカウンターに置かれたカクテル
を一口飲んでダンスフロアに行く。

佐藤は女の横に立つ。

女の横顔を見つめる。

女が佐藤を怪訝そうに見る。

佐藤「あ、あの」

女「はい?」

佐藤「俺、ここ初めてで」

女「で?」

佐藤「きょ、今日はいい天気ですね」

女「?:」

佐藤「すみません」

佐藤はすごすごと帰つてくる。

大塚「話せた?」

小谷 「何話した？」

佐藤 「……たわいないこと」

小谷 「よし！今日は10人に声かけしよう」

大塚 「俺はこれで」

小谷 「あれ、もう帰るの」

大塚 「うん。佐藤さんがんばってね」

大塚は出ていく。

佐藤 「終電なのかな」

小谷 「あいつはすぐ近くのワンルーム住みだ

よ。すつごい金持ちだから」

× × ×

佐藤がスマホを見ている。表示されて
いる時刻は0時。カウンターでうつぶ
せに寝ている人も何人かいる。

小谷 「10人目だな」

佐藤 「ええ」

小谷 「バングまでもう一歩だ。誰にする？」

佐藤は周囲を見回す。

小谷 「俺ならあの子かな」

小谷は金髪のすらりとした女を指さす。

佐藤 「派手すぎない？」

小谷 「遊び慣れてる感じの子は意外といける
んだよ。さあ行け」

佐藤はその女、えり（36）の方に歩
いていく。

× × ×

佐藤 「こんばんは。俺、佐藤つていいます」

えり 「カウンターにずっといるね」

佐藤 「え？」

えり 「いろんな子に声かけてたでしょ。かな
り目立ってるよ」

佐藤 「：：：」

えり 「ここ初めて？」

佐藤 「うん。名前は？」

えり 「私はえり」

佐藤 「えりさんか。クラブ、よく来るの」

えり 「ほぼ毎晩」

佐藤 「ナンパとかよくされるでしょ」

えり 「だいたい無視してる」

佐藤 「やっぱそなんだ。俺は大丈夫？」

えり 「害はなさそう。草食系って感じ」と、笑う。

佐藤 「よかつた」

えり 「踊らないの？」

佐藤 「飲み専門。えりは飲まないの？」

えり 「まだ一杯しか」

佐藤 「よかつたらカウンター来ない？おごるよ」

えり 「ピニヤコラーダあるかな」

佐藤 「ピニヤつて。え？なんでもあると思う」

えり 「じやあ、うん」

佐藤とえりはカウンターに来る。

小谷 「ひさしぶり」

佐藤 「えつ？なに。知り合いなの」

えり 「そうだよ」

佐藤 「なーんだ」

小谷 「けつこうしやべれてたじやん。えり、どうだつた」

えり 「最初はあんな感じでいいんじゃない」

小谷 「自信ついた？」

佐藤 「はい。意外といけるかも」

小谷 「よし。今日はここまでだから。また来週、続きをやろう。疲れた？もう一杯飲んでく？」

佐藤はカウンターに座る。えりが隣に座る。

佐藤 「小谷さんは付き合い長いの」

えり 「20年近くなる」

佐藤 「そんなに」

えり 「一樹君とは高校生のとき出会ったから」

佐藤 「同じ高校？」

えり 「いえ、この町で」

佐藤 「ヤンキーだつたんだろうなあ」

えり 「一樹君、20代のころはすごいやんちやで。クラブでナンパしまくつてて。ちんぽざる、つてあだ名で」

佐藤 「(笑つて) へえ、ちんぽざるね」

佐藤はスマホを見る。時刻は0時半。

佐藤 「俺、終電なんで」

佐藤はお辞儀して離れる。

小谷は片手を上げる。

振り返るとカウンターに座つて小谷と
えりが話している。

○駅前不動産外観（朝）

○同・店内

佐藤がパソコンに向かつて仕事してい
る。

さやかが隣に来る。

佐藤 「おはようございます」

さやか「おはよう。昨晚、どうだった」

佐藤 「特に何も」

さやか「小谷君と会つたんでしょ」

佐藤 「ええ。クラブ行きました」

さやか「で、結果は」

佐藤 「何人かと話しました」

さやか「それで？」

佐藤「それだけ」
さやか「ふうん」

鈴木が近くで聞いている。

鈴木「何かいいことあつたんですか」

佐藤「いえ、何も」

鈴木「楽しそうだつたから何かあつたかと」

さやか「佐藤君、クラブ行つたんだつて」

鈴木「クラブ：：：またまた。佐藤さんらしくないな」

さやか「彼女できたら教えてね」

× × ×

佐藤のスマホが鳴る。

小谷からのライン。声かけの文言、会話のテンプレ一覧という添付ファイルが送られてきている。
さやかが覗き込む。

さやか「真面目にやつてるね」

○クラブ外観（夜）

T「3か月後」

○ 同・ダンスフロア

頭にネクタイを巻いたワイシャツ姿の佐藤が適当に踊っている。かなり酔っている様子。

周りの若者たちはひそひそ話したり、笑って見ている。

カウンターでそれを眺めている小谷と大塚。

小谷 「あいつ、キャラ変わったな」

佐藤がカウンターに戻つて来る。

小谷 「何かあつたのか」

佐藤 「いやー、汗が気持ちいい」

大塚 「ストレス発散だね」

佐藤 「ちよつとトイレ行つてくる」

佐藤はトイレ歩いていく。

× × ×

トイレ前に女の子が数人並んでいる。

その中に涼風いな（32）。高級そうなワンピースを着て、腕組して立つて

いる。

佐藤はれいなを見る。れいなは俯いて
いる。

佐藤は男子トイレに入つて行く。

× × ×

佐藤がトイレから戻つて来る。

まだれいなはトイレ外に立つている。

佐藤「あのトイレ前で腕組みしてゐる子、よく
見る？」

小谷「たまに來てるな。女の子数人で」

佐藤「ふうん」

大塚「ああいう子がタイプなの」

佐藤はうなづく。

小谷「今までの訓練の成果をみせてみろ」

佐藤はトイレ前に再び行く。

佐藤「やあ」

れいな「…」

佐藤「何度も見かけて気になつて」

れいな「あその人たちのお友達？」

れいなはあごをしゃくる。

佐藤 「ああ、そうだよ」

トイレから女が一人出てくる。

れいな 「じやあ。お手洗い入るんで」

佐藤 「うん。俺、佐藤。また会つたらよろし

く」

れいなはトイレに入る。

佐藤はカウンターに戻つてくる。

佐藤 「決めた。あの子を彼女にする」

大塚 「おおー」

小谷 「よく言つた。男になれ！」

○ クラブ外観（夜・日替わり）

○ 同・ダンスフロア

佐藤と小谷が体を揺すつて音楽を聞いている。

佐藤 「あの子来ないかな？」

小谷 「あ、あそこ」

れいなと女たち3人組がフロアに入つて来る。

小谷 「一人になつた時に行きな」

佐藤はうなづく。

× × ×

れいなが友達と離れ、カウンターの
ドリンク販売所に来る。佐藤が近づく。
フロアに流れる曲がライムスターの
「人間交差点」に変わる。

佐藤 「やあ」

れいなが振り向く。

佐藤 「よく会うね」

れいな 「誰？」

佐藤 「わからんないかな」

れいな 「：：あつ、思い出した。小谷さん
の友達」

佐藤 「小谷さん、知ってるの」

れいな 「D Jでしょ。D J一樹。友達がフア
ンだから。この界隈ではけつこう有名だ
よ」

佐藤 「そつか。ドリンク、何飲む？」

れいな 「何にしよつか」

佐藤「君の名前は？」

れいな「涼風れいな」

佐藤「涼風れいな。：：：涼し気な名前だ
ね」

れいな「よく言われる」

佐藤「ちょっとカウンターで話さない？」

れいな「友達、待ってるから」

佐藤「ラインやつてる？連絡先教えて」

れいな「いいよ。これ」

れいなはスマホをポケットから出す。

×

×

×

佐藤が小谷の所に戻つて来る。

小谷「どうだつた」

佐藤「バングできた」

小谷「やつたじやん。豆夫も成長したなあ」

○駅前不動産外観（朝）

○同・店内

佐藤がパソコンに向かって仕事してい

る。

鼻歌を口ずさんでいる。

鈴木「何かいいことあつたんすか」

佐藤「いや、まあ」

鈴木「いつも死んだような顔してゐるのに」
さやか「できたの」

佐藤「(笑顔で) できそうです」

鈴木「佐藤さんに彼女。らしくない」

佐藤はスマホでラインの画面を見せる。

佐藤の「ひまなら、今晚飲まない?」
にれいなが「いいよ」と答えている。

さやか「やるじやん。どこで飲むの」

佐藤「パソコンで探してます」

パソコンの画面。食べログが表示され
ている。

○居酒屋・外観

○同・店内

座敷で向かい合って座る佐藤とれいな。

佐藤「涼風さんはよく、クラブ行つての」
れいな「夜眠れないこと多くつて」

佐藤「一人でも行く？」

れいな「一人じゃ行かない」

佐藤「俺のことどう思う？」

れいな「優しそう。あと女の子に慣れてなさ

そう」

佐藤「もてなそそうって言われなくてよかつた
よ。（笑う）元々理系でんまり女の子と
接する機会がなかつたんだ」

れいな「ふーん。大学は？」

佐藤「秋葉原にあるとこ」

れいな「どこだろ」

佐藤「東京電機大」

れいな「知らない」

佐藤「オタクが多い。それでこうなつた。学

生時代は勉強ばかりしてて」

れいな「理系でもモテる人もいるでしょ」

佐藤「いや、理系はホモが多い」

れいな「（笑つて）それ偏見でしょ」

佐藤「趣味は音楽?」

れいな「音楽とライブ」

佐藤「へえ。よかつたら今度、ライブ行かない? 夜中の首都高とかどうかな」

れいな「何乗ってるの」

佐藤「えーっと」

佐藤はれいなに見えないようスマホに「車デー卜」と打ち込む。

れいな「ん?」

スマホにハチロクの画像が何枚か表示される。

佐藤「ハチロクだよ」

れいな「聞いたことがある。乗ってみたい」

佐藤「え? ジやあライブしようよ」

れいな「それよりライブ行かない?」

佐藤「ライブ?」

れいな「下北沢で推しのライブがあるの」

○下北沢駅前

れいなが立っている。佐藤が改札から

出てくる。

○ライブハウス内

込み合っているフロア。

佐藤がきょろきょろしている。

佐藤「俺、ライブなんて初めてだよ」

れいな「ふうん。珍しいね」

佐藤「あんまり遊んでなくってね」

れいな「初体験？」

佐藤「ああ」

れいな「もしかしてディズニーも？」

佐藤「足を踏み入れたことない。俺にとつて
は聖地だな」

ステージに派手な格好のビジュアル系
バンド、男性4人が出てくる。

ボーカル「みんな、今日も盛り上がつていこ
うぜ。よ！ろ！し！く！」

ボーカルは背中を見せる。赤い革ジヤ
ンに「夜露死苦」と書いてある。
盛り上がる観客。

演奏が始まる。

ジヤンプする観客たち。れいなもジヤンプを繰り返す。佐藤も苦笑いしつつ周りに合わせている。

○ライブハウス外

ファン達がバンドメンバーが出てくるのを待っている。

佐藤とれいなもいる。

佐藤「遅いね」

れいな「うん」

佐藤「もう1時間も：：」

れいな「用事あるなら先に帰つてもいいよ」

佐藤「明日の映画は大丈夫？」

れいな「うん。7時に映画館前だよね」

ライブハウスの通用口からバンドメンバーゲ出でくる。私服の若者達。

れいな「若杉くーん」

れいなは手を振る。

メンバーの一人、若杉（25）がれい

なを見る。れいなはポケットから何か取り出して彼に渡す。赤いバンダナ。

男は、それを頭に巻いて何か呟く。

佐藤「プレゼント？」

○映画館前（夜）

めかしこんだ佐藤が立っている。スマホを取り出して時刻を見ている。

スマホの表示は7時。周りはカツブルでいっぱい。

佐藤はラインに「何かあったの？」と打ち込む。

○バー店内（夜）

高級そうなバー。れいなは若杉らバンドメンバー4人、女の子3人と一緒にテーブル席で談笑している。楽しそうな表情。

○映画館前（夜）

一人でぽつんと立っている佐藤。

雨が降っている。

○駅前不動産・店内

佐藤が座っている。さやかが近くに来る。

佐藤「彼女できそうです」

さやか「前に言つてた子？」

佐藤「ええ。金曜にドライブ行きます」

さやか「もう告白した？」

佐藤「海ほたるで告白します」

さやか「いいなあ。がんばってね」

佐藤「あの……なんで応援してくれるんで
すか」

さやか「うーん。母性本能かな。仕事がんば
つてるし幸せになつてほしいじやん」

○佐藤の部屋（夜）

佐藤が電話をかけている。

佐藤「金曜の晩に決まった」

小谷の声「やつたじやん」

佐藤「事前に走っておきたい」

小谷の声「そうだな。そのほうが余裕がもてる。つきあうよ」

○コンビニの駐車場

佐藤が黒いハチロクの前に立っている。
サングラスをかけている。

小谷が来る。

小谷「いい車じやん。レンタル？ 買ったわけ
じゃないだろ」

佐藤「もちろん」

小谷「どこ行く？」

佐藤「レインボーブリッジを通って、海ほた
るで食事」

○車の中

佐藤が運転している。小谷が助手席に
座っている。ボサノバの曲が流れてい
る。

道が混んでいる。うんざりした様子の

佐藤と小谷。

小谷 「混んでんなあ」

佐藤 「トイレ行きたい」

小谷 「女の子がトイレ行きたいとか言い出し
たら最悪だな」

佐藤 「いちおう買つてきた」

佐藤は簡易トイレのパックをバツグか
ら取り出して見せる。

小谷 「最悪の事態だな」

佐藤はズボンのチャックを開けて用を
たしている。

小谷は窓の外を眺めている。

佐藤 「夜中はすいてるっしょ」

小谷 「あとこれ」

小谷はポケットから香水の容器を出す。

小谷 「ホワイトムスク。これを置いとくとい
い。女の子が好む臭いだから」

佐藤 「ありがとう」

×

×

×

車の窓からディズニーランドが見える。
日が沈みかけている。

小谷「千葉に行くんだつけ」

佐藤「いや、道間違えたかな。もう一度元の
場所に戻ろう」

小谷「首都高は無理なんじゃね？」

佐藤はスマホを見る。4時を指している。

佐藤「夜まで付き合える？」

小谷「腹減った。どこか止めて」

○アパート外観（夜）

○同・佐藤の部屋

佐藤が仰向けに寝て、天井を睨んでい
る。

置時計の表示は木曜日。針は2時を指

している。

佐藤「眠れん」

○ タワーマンション外観（夜）

○ 同・れいなの家（夜）

れいなが電話をかけている。相手はみ
か。

れいな「ドライブ行くことになつた」

みかの声「クラブでナンパしてきた男？」

れいな「そう。D.J.一樹の友達。みかは？」

みかの声「私も明日」

れいな「どんな男？」

みかの声「いつもと同じよ。遊び慣れた感じ。

どんな感じの人？」

れいな「真面目そうで、あんまり女の子に慣

れてないみたい」

みかの声「ふうん。珍しいね。つきあつてあ

げてるの」

れいな「うん。あいうタイプ、初めてだか

ら。お友達として」

みかの声「ラダースの若杉君とは？」

れいな「この前、食事した」

みかの声「どこまでいったの」

れいな「もうちよつと押してくれたら許しちやうかも」

みかの声「やらせちやうんだ。男好き！」

電話が切れる。れいなは窓の外を見る。

東京の夜景が広がっている。

棚の上に写真が飾つてある。れいなが男と肩を組んで笑つている写真。

○コンビニ駐車場（夜）

佐藤が車の前に立つていて。れいなが来る。

れいな「こんばんは。待つた？」

佐藤「いや、全然」

○首都高の光景（夜）

高層ビルが連なつていて。

すいている道を走る佐藤のハチロク。

ビルからの光が車体に反射している。

○車の中（夜）

ボサノバの流れる車内。

れいな「タバコ吸つていい？」

佐藤「どうぞ」

れいなは少し窓を開けてタバコを吸う。

佐藤「ドラッグとかやったことある？」

れいな「なんで。もちろんないよ。犯罪じやん」

佐藤「……変なこと言つた。ごめん」

れいな「……」

前方には高層ビルが連なつていて。

佐藤「こういう景色好きでしょ」

れいな「うん。沖縄とか北海道の大自然の景

色もどっちも好き」

佐藤「俺も。北海道も沖縄も行ったことない

けど」

れいな「海外は？」

佐藤「ないね。関東から出たことない」

れいな「珍しいね」

佐藤「れいなは？」

れいな「親が商社に勤めてて、子供のころニューヨークで暮らしてたし、外国はあちこち行つたよ」

佐藤「帰国子女か。俺は外国とは全く縁がないな。英語も全然しやべれないし」

れいな「そうなんだ。ハワイ行きたいなあ」

佐藤はれいなの腕に触れようとする。

れいな「なに？」

れいなは腕をどける。

佐藤「俺、れいなのがことが……」

れいな「ごめん。私、夫がいるから」

佐藤「え？」

れいな「言わなかつたつけ」

佐藤「聞いてない」

れいな「ロサンジエルスに出張してて。1年

間」

佐藤「そつか……」

れいな「うん。ごめんね。そういうのは無し

で」

佐藤「……」

○コンビニ駐車場（夜）

車の前に立つ佐藤。れいなが手を振つて去っていく。佐藤も手を振つて返すが暗い表情。

○居酒屋外観（夜）

○同・店内

カウンターに佐藤と小谷が並んで座つている。

小谷「人妻に本気になつちやダメだよ」

佐藤「：：：」

小谷「割り切つて付き合わないと」

佐藤「なんでデートに応じてくれたんだろ」

小谷「お友達として、じやないの。その気にならなかつたんだろ」

佐藤「：：：」

小谷「結局、魅力のある男の方に女は流れるんだ。うまくいけば素人童貞から脱せたの

にな。佐藤さんがそれだけの魅力がなかつたつてことだ」

佐藤はショックを受けている。

小谷「いろんな女の子と関わって、男を磨いていけばいいよ。俺も大塚さんも数えきれないくらい振られてきてる。大したことじやない」

佐藤「何度も：：」

小谷「嫌われはしなかつたんだろ。いいじやん。飲んで忘れな」

小谷はそう言つて、佐藤のグラスにビールを注ぐ。

○ラブホテル外観（夜）

酔っぱらつたれいなと若杉が手をつないでラブホテルに入つて行く。

若杉「旦那さんいるんだろ、いいの」「れいな「それは言わないで」

若杉「燃えてきた」

若杉はれいなを抱きしめる。れいなは

笑つて いる。

○ 駅前不動産外観

○ 同・店内

佐藤の席が空いている。

鈴木「佐藤さん、どうしたんでしょうね」
さやか「……」

○ 佐藤の部屋

佐藤は寝転がって天井を睨んでいる。
顔を腕でおおう。

○ 喫茶店外観

○ 同・店内

佐藤と小谷が向き合って座っている。

小谷「なんにせよ経験は積めただろ」

佐藤は封筒を小谷に渡す。小谷は封筒をポケットに入れる。

小谷「本当は10代で経験しないといけないことだよ。失恋の痛みなんてな。10年遅れて、人生の課題クリアーってとこだな」

佐藤「人生の課題ね」

小谷「また次に行けばいいよ。女なんていくらでもいる」

佐藤「：：：」

小谷「それと：：アドバンスコースっていうのもあるけど受けてみる？」

佐藤「ボーナスが出てから」

○駅前不動産・店内

佐藤が中年女性に何か話している。中

年女性ははい、はい、と返事している。

佐藤「社長」

荒井「なんだ」

佐藤「俺、営業ります」

荒井「そつか。わかった。考えが変わった

か

佐藤「事務はあまり稼げないから。営業の方

が成長できそうだし」

荒井「そうだな。歩合も出るし、がんがん稼いでくれ。期待してるぞ」

○コンビニ外観

○同・店内

佐藤がまきのいるレジに向かう。

まき「（微笑んで）いつもありがとうございます」とい

す」

佐藤「笑顔がいいね」

まき「いえ」

佐藤「いや、いやされる」

まき「からあげくんは？」

佐藤「そうだな。今日は2つもらおう。（名

札を見て）伊藤さんっていうの」

まきはうなづく。

佐藤「俺は佐藤」

後ろに他の客が来る。

佐藤「すぐそこで働いてるから。次の休みは

いつ？」

後ろの客がイラついて舌打ちしている。

佐藤「じゃあ、また」

まき「(苦笑いして)はい」